

して見えたればなり。是故に我は彼の現前を何等の制限と感ぜざり
 しまで、深く感情に走りしなりけり。我が斯の如きを見て、彼は多様に
 吾が感情を揣摩したり、我は此所を去る前何事をか彼に語りたりしと
 思ふ、而して彼は吾が聲の涙に濕ひたるを心づきぬ、是故に彼は驚異の
 極、獨其の床に留まれりき。我は無花果樹の下に身を投じ、涙を其の溢
 るゝに任せたり。兩眼の横流溢れて止むことを知らざりき。爾の目
 に嘉納せらるべき犠牲こそ思ふ。其時我絶へず爾に此等の言語を叫
 びたり、言語自身の爲ならず、唯此の一個の趣意の爲なりき。曰く、嗚呼
 主爾は何日までか、嗚呼主爾は何日までか、爾は永久我を怒りたまふ耶。
 嗚呼吾が神願くは吾が既往の不義を心に記めたまはざらんことを、詩
 七九〇五、八と。蓋は我は此時不義の爲に固く執へられたること感じ
 て、痛く哀み痛く哭き、何日までか、何日までか、明日然り明日せんか、噫何
 が故に今せざる乎、何が故に今此の時を吾が敗徳の終と爲さざる乎と

叫びし故なり。

切痛なる心中の悔根に泣きつゝ、獨り斯く語りし間、我、聲の隣屋より來
 るを聞けりき。其の聲は小兒か小女か我之を知らざりしが、吟調を以
 て此等の言辭を反覆せりしやう見えてき、曰く、取りて讀むべし、取りて
 讀むべしと。我直に面を改め、彼の家に何等かの遊戯行はれて、小女之
 れが爲に此等の言辭を唱ひしものと俄に熱心に考へ起したり。然れ
 ども其の吾が會聞なりしか否かを思ひ起す能はざりき。我迷る涙を
 停めて身を起せり、蓋は我は聖書を啓きて初に目を留めし聖句を讀
 めてふ神命なりと考へざる能はざりし故なり。蓋は我アントニイが
 嘗て或る教會に入らんとせし際、偶讀まれしは福音書の此句、往て汝が
 有てる一切を賣りて、之を貧者に施せ、然らば汝天に於て財貨を得ん、而
 して來りて我に従へ、太十九〇二一なりしこと、彼此聖句を服膺し、遂に
 此の垂示に由りて其場を去らず爾に歸依したりし事を、前に聞きたり

し故なり。

我是に於てアリピアスの座せる所の處に走せ返れり。蓋は我彼の傍を去りしとき、彼の使徒の書翰を其處に残して置きし故なり。我之を執り之を啓き、吾が眼先留まりし、聖句を讀みたれば、曰く「發鑿、酪醒する勿れ、淫洗、放蕩なる勿れ、分争嫉妬する勿れ、惟主イエス、キリストを衣よ、肉慾を行はん爲、肉體の備を爲す勿れ」(羅十三〇十三、十四)是より以上我讀むを欲せざりき。又其の必要も之無かりしなり。我此の文の末句に讀み到りしとき、平和の光吾が心頭に射し來りしを覺えて、諸の疑念の雲天外に滅え了れり。我此の紙葉の間に指又は他の記號物を挿入して之を閉ぢ、平和なる顔色を以てアリピアスに事情を語りき。其時彼始めて我が未だ嘗て知らざりし所の彼自身の感情を啓示せりき。「彼亦久しく福音に心を屬したりしなり」彼我に請ふに我が讀みし所を示さんことを以てせり、我彼に其の本文を示せしに、彼我が讀みし其よ

り以下を讀み下せり、我其の下文を知らざりしなり。下文は此の如くなりき、曰く「信仰の弱き者を容れよ」(羅十四〇一)彼此句を己に當られたりとして之を我に説明せりき。彼此等戒告の言に勇氣を得、善なる趣意と決心とを以て、天性我より負に優りたりし徳性の傾向を追ひ求めたり。我即時吾が母の許に至り、吾が改心の事實を告げて大なる喜びを母に與へぬ。然して吾が其の如何にして此に至りしかを語りしとき、母は雀躍と凱歌とに心を満たされ、吾人の求むる所思ふ所に益りて成し得る所の爾を祝しぬ。蓋は母は爾の己に許容したまひし所、其の嘗て我が爲に涕に咽べる悲歎を以て願ひし所よりも負に優りたりし故なり。蓋は爾我が妻をも又大凡此の世の望をも願はず、獨吾が足を信仰の定木の上に定めたりしまで、然までに完く我を爾に歸依せしめたまひし故なり。即ち是れ久しき以前母が我を其の夢象の上に見たりしが如し。而て爾は彼女の悲歎を易へて歡喜と爲したまへり。

其の敢て勝りし物より遙に圓滿なる歡喜、其の吾が子孫に之を得んと望みたりし所より、遙に尊く深き歡喜、是れを彼女の歡喜なりける。

第九篇

彼茲に其の修辭學の教授を辭すべき心を決し、之を來らんとする葡萄收穫祭まで延期せしことを語り、次で彼其の友人エレカングスの別荘に於ける其の退隱と、其の没式バツクスと、其の母モニカの徳操と及び其の死とを語る、是は彼の没式を受けし後同じ年の内に起れり、即ちアウガステンの三十三歳の時なり。

第一章

彼神の善徳を頌め、己の福苦を認識す。

嗚呼主よ我は爾の僕なり、我は爾の僕にして爾の婢の子なり。爾吾が骨を碎きたまへり、我爾に讚美の犠牲を獻げまつらん、請ふ吾が心吾が舌をして爾を美めしめ、我骨をして日はしめよ、嗚呼主誰か爾に等き者あらんや」と(詩三五〇十)。請ふ爾之に答へて吾が靈魂に曰ひたまへ「我は爾の救なり」と、嗚呼我果して何人ぞ、嗚呼我果して何物ぞ。吾が衷に、將た吾が行爲に、惡ならぬ何物あり乎。是は吾が行爲に在らざれば我

が言語に在り、吾が言語に在らざれば吾が意志に在り。然れども主なる爾は善にして慈悲に富ませたまふ。爾の右手吾が死の淵に注意し、吾が心の土底より徐々に腐敗の海水を乾しまたひき、何物か其の腐敗なる、他なし、爾の意みたまふ所我之を意ます、爾の意みたまはぬ所、我之を意む是なり。

尙且此多年の間、吾が自由の意志は何處に在りし乎、何等の隠所より此く即時に喚起せられて能く吾が首を爾の易き輓の下に、吾が肩を爾の輕き荷の下に置くを得たる乎。嗚呼、吾が援助者、吾が救主、基督耶穌よ、痴情の甘美を已や味はぬと云ふこと如何に甘美と即時に我に見えし乎。吾が失はんと悲しみし者を棄つること、即ち是れ喜なりき。蓋は之を棄てし者は眞の最上の甘美にて在ます、爾の外無かりし故なり。爾之を投げ出して其の所を填充したまへり。爾は吾が快樂よりも甘美なり。唯血肉に知られざりしのみ。吾が光よりも輝けり、唯心底の

覆面の背後に隠れたりしのみ。一切の名聞よりも崇むべし、唯己の目を以て崇めたる者に然らざりしのみ。是故に吾が靈魂は野心と功利心とに咬まるゝが如き痛心をば免れ、汚泥の中に轉輾し、肉慾の痒を搔く醜辱を脱れて、小兒の如く爾に語れり。嗚呼、主、吾が神、吾が光、吾が富、吾が救よ。

第二章

彼爾爾以獲祭の安息日まで、其の修辭學の教職を辭するを延期す。

爾の見たまへりし如く我激昂的突率を以てせず、漸々徐々に贅辯の市場より己が口舌の職を致さんと決心せりき。是故に爾の律法にも非ず、爾の平和にも非ず、徒に堅白異同の辯法、法廷の論戰を學ばんと欲する學者輩は、復吾が唇頭より彼等の狂妄を助け長する武器を買ふべから

す。幸なる哉葡萄收穫祭の安息日まで餘る所唯數日のみなりしとや。然れば我は此數日を最も善く使用するに決したり、是れ我に正當なる形式を以て辭職するを得ん爲なりき。蓋は我が一たび爾の爲に買はれし以上、再び己をやるべく挺出する能はざりし故なり。當時吾が計畫は唯爾に知られしのみ、人には吾が親友の外知らるゝ無かりき、蓋は吾人同志は其の公にせられざらんことを決定したればなり、縱令吾人が今涙の谷より出で、「京詣」の歌を歌ふに當り、爾は吾人に鋭き矢と熾けたる炭とを與へて、以て忠告の假面の下に反對し、其の愛する者を濯の如く嘔下さんとする所の舌を禁遏すべからしめたりとはいへ。爾は其の愛の矢を以て吾人の胸を貫き、爾の言は固く吾が肉に着き、而して爾、其の黒さを變へて白く照らしめ、死より出で生に入らしめたまひし所、爾の諸の聖僕の摸範が、吾人の回想の底に己を羅列し、有らふる吾人の怠慢的因循を焼き盡せりき、是故に吾人は其の陷井に陥ると能は

ざりき。然り是等の摸範の、吾人の衷に興せし火燄の猛烈なるや、詭詐の舌よりする所の反對の呼吸は反りて此の火勢を煽ぐに止まるばかりなりき。

莫遮、爾が全地の上に聖めたまひし聖名の爲に、吾人の誓言と目的とは必ずや又之を稱讚する者を興すべきは審かなりと云ふこと見て、吾人は若今然まで近きし所の休暇を待たず決行せば、其の反りて矯飾らしく見えんことを慮りき。若我此の日に先ちて顯著なる公職を去りしとせば、衆人の耳目吾が行爲に聚注すべし。彼等は必ず相謂はん、我葡萄收穫祭に先つやう急ぎたり、是れ己に價値を附せんと欲せしが故なりと。我豈吾が改悟の市中の雜談となり、随つて吾が善を誹らるを望むべけん乎。且此の夏吾が肺、文業の壓逼の下に敗れ、一呼吸の長きを曳くに、甚だ困難を感じ、胸中に禍害を指し示し、苦痛を感じ、音聲啞れて、心氣倦み易きを覺ふるに至れりき。此の疲勞往には甚だ我を傷めぬ、

録悔懺ンチスガウア

蓋は此の疲勞は必ずや我をして義務の重負の下に仆れしむるか、然らずんば又必ずや休暇を得て治療を受け以て吾が健康を回復するを待たしむるやう見えなければなり。然れども我が静息して神の在すや否を見るべく確然不拔の志を立てしや否、我は正直なる辭職の口實を得たりしことを喜べりき。(嗚呼神爾知しめす)。此口實や以て吾が弟子の父兄の反對を防ぐに足りき、蓋は彼等は其の子弟の爲に吾が職を去ることを決して許すまじければなり。

如上の歡喜に心を満たされて、我は時間の駛するを待てりき。其は恐くは二十日に上らざりき、尙且其は吾が忍耐の精神には苦痛なりき。蓋は往に賤役の苦痛を堪へたりし名譽心を今失ひたれば、若し忍耐の之に代る無りせば、我は壓潰さるべかりし故なり。爾の僕なる吾に兄弟の或人は、或は曰はん吾が心既に全く爾に仕へんと決せるに當り、我が猶一時間も虚偽の椅子に残れるは罪惡なりと。我之を争はざるべ

し、然れども慈悲極めて深く在し。す神よ、爾は此の外吾が一切の恐ろしき又不幸なる罪過に併せて、亦此の罪をも爾の聖き水に由りて赦免したまはざりし乎。

第三章

エレンカングス己の別荘を彼に許假す。

然れども此の吾が幸福、エレンカングスに大なる禍害となりき。蓋は初くも彼自身を結着したる紐を頼みし吾が交際を絶たれしこと、否、寧ろ彼自ら吾が交際を斥けたることを見し故なり。彼未だ基督信者に非ず、唯其妻其なりき。然れば彼女は實に彼が爲に凡の防碍の最も重澁なる物、吾人が往々舟に乗りかけたりし旅行の企圖〔社會的生活〕に就き極力彼を沮みたりき。彼言ふらく己に不可能なるに非ざる他の方法

録悔懺ンチスガウア

を以て基督信者たらんには吾が願慮せざる所なりと、然れど彼は甚だ吾人に親切なりき、蓋は彼其の田舎を吾人に假與なし、吾人が茲に滞在せし間、之を占領することを許したればなり。嗚呼主よ爾は義人の復活たゞしきことらんとき、彼に報賞を爲したまはん、蓋は爾は既に義人の運命を彼に與へたまひし故なり。蓋は我が羅馬に往きて在らざりし間に、彼は肉體の病に襲はれ、忠實なる基督信者となりて此の世を去りたりし故なり。是故に爾は獨彼のみならず、我をも併せて甚だ仁慈に待遇したまひき。蓋は爾は我が他の多大の親切を記憶すると倅しく、尙且彼を爾の羊群の中に算入し得ざるが如き不可忍の沉痛より、今我を救ひたまひし故なり。

嗚呼吾が神我爾に我が爾の物なるを感謝す、爾の戒告、爾の慰藉、能く之を證すればなり。爾の約束は眞なり、人世の暴風を避くべく、爾の中に吾人の發見したる此の隠家、カシシアムに於ける此の田居の爲に爾は

エレカンダスに報ゆるに其の極樂園パラスの快樂を以てしたまふらん。此處には春は爾の聖き山の上に、爾の多實なる丘陵、乳と牛酪と溢るゝ山の上に無窮なり。蓋は爾此世に於ける彼の罪を悉く免したまひたれば、エレカンダスが我が爲に悲哀を感じたりし同時に、キプリデアスは愉快を感じき。蓋は彼當時猶未だ基督信者に非ず、危険なる誤謬の罪に陥り、眞理なる爾の子の肉を幻影と信じたりしとはいへ、彼は直ちに誤謬に對する奮闘を生起し、再び自主の人となれり。彼猶未だ爾の教會の聖禮に由りて没められざりしとはいへ、尙且彼は眞理に對する熱心なる研窮者となりき。彼は又我爾の没式マツトに由りて再生を得たる後、忠實なる正統的信者となり、其郷國亞弗利加に歸り、完き貞潔と制欲とを以て爾に事へ、其の全家を基督に貢獻し、以て爾彼を其の肉より救ひたまひし日までに及べり。彼今安然に父アブラハムの懷に活きたり、其の懷は果して何を意味せりとも、此の懷に吾が愛する友、爾の自由を

録悔懺ンチスガウア

與へし民、世嗣とせられし子チブリアスは活く、實に彼は此の懐に活く。蓋は此の如き美なる靈魂の爲、茲處ならで他の何等の所あり乎。彼は憫れなる無智者なりける我に向ひて、屢恒に尋ね居たり其の住居に今在りて活く。彼は復た其の耳を吾が唇に傾けず、其の靈唇を爾の聖山に接けて、飽くまで爾の智慧を飲み、其能力と渴望とを充し、永劫幸福に生存す。尙且我は彼が其の飲物に酔ひて我を忘るゝに至れりと思ふと能はず、蓋は主爾は我を忘れたまはず、而して爾實に其飲物にて在ます故なり。當時我に於て然りしなり、即ち我エレカンダスと吾が交誼を維持して、吾が卒然たる改心に由來せる彼の悲哀を和め、彼に勤むるに其位置即ち有妻生活に適應したる専門に従ふことを以てせりき。〔是はエレカンダスが、妻を去りて彼と獨身生活を共にせんとせし虞ありし故なり〕。我又チブリアスの來りて我に合せんとを埃ち、距離然く短かりし故に、日として彼を望まざるは無かりき。嗚呼日は終

録悔懺ンチスガウア

に空しく過ぎぬ。其日數の多く且長く見えしは、平和と自由に對する吾が追慕の切なるに因れり。是は我が心の底よりして、吾が心爾に向ひて我爾の面を尋ねたり、主よ我爾の面を求めたりと曰へり〔詩二七〇八〕と歌ふ機會を得んが爲なり。

第四章

彼カシシアムに於て書を著し、チブリアスに書翰を贈り、詩篇を讀んで歡喜に充ち、齒痛より救はる。

而て我が正式に教授職より解かるゝの日來りぬ、是は心に於ては既に己に解かれたりき。事は行はれぬ、爾往に吾が心を釋したまひし如く、今吾が舌を釋したまへり。我大なる歡喜を以て爾に祝謝し而て別莊に退きぬ。我が茲にて書きし物は既に爾の用に獻げしとはいへ、猶待

録悔懺ンチスガウア

命中に在りて、學者的倨傲の風を存する所の文體を以てせりき。而して我が茲に書きし物は吾が「議論」中に記されたる物即ち茲地に有りしほどの朋友と爲し、討論又爾の前にて我自ら爲し、所の討論及び猶離れ居りしチブリアスに與ふる書翰中に書されたる事どもなりき。當時爾の我に顯したまひし諸の善事は之を茲に記すに違なし、蓋は我更に大なる善事に急行せざるべからざるを以てなり。蓋は主よ爾如何なる内面の距を以て我を訓練したまひしか、如何にして我を鞭ちて平野の如くならしめ、吾が思想の高山を夷げ、吾が曲屈たる所を直く、吾が崎嶇かる所を平にし給ひしか。如何にして吾が眞實の兄弟アリビアスを爾の獨子、吾人の主、救主耶穌基督の名に歸服せしめたまひしか。今我之を憶ひ興し之を爾の前に告白するを甚だ楽しく感ずればなり。アリビヤスは初、我が彼の歸順の事を記すことを許さず、其の謙徳に出で、謂へらく、此くするは蝮に有毒なる、而して治療の功ある教會の蕙

録悔懺ンチスガウア

草の芳香にあらで、主の碎きたまへる學舎の栢の惡臭を以て、吾が紙葉を汚さるべからずと。嗚呼吾が神我此等信仰の讚歌なるダビデの詩篇を読みしとき、我爾に向ひて如何ばかり哭き號びし乎。蓋は彼の敬虔なる音譜は、傲慢の精神を容るべき餘地無ければなり。我猶爾の眞の愛に於ける一新入者、一求道者、我と等しき求道者なるアリビヤス及び一婦人にして然も其の信仰に於ては然も男子らしき吾が母と與に、田舎に在りて聖日を守る者に過ぎざりしなり。老境の平靜、母たる愛、眞の基督信者の忠信、是皆母の有なりき。我如何に此等の詩篇に由りて爾に向ひて歎きしか、此等の詩篇が如何に吾が心を熾して爾に向はしめたりしか。我又如何に心熱して詩篇の全部を全世界の上に歌はんと欲せし乎、若之に由りて人倫の高慢を滅却するを得たらば。尙且詩篇は全世界の上に歌はれ、而して爾の光被の外に己を隠し得る者なし。我彼のマニ教徒に

對して如何に強く鋭き憤慨を興したりし乎、尙且つ彼等を憫まざる能はざりき。蓋は爾の救極的聖禮を味ひ知らず、己を治し得る良藥に向ひて妄語しつゝあるが故なり。願くは彼等の我が知る所とならずして、何處にか其の身を近づけ、以て吾の面を俯瞰し、以て我が詩の第四篇(二)を讀みしとき、其の詩の我に爲し、所を、我が讚嘆の聲に由りて知りたらんことを。

(一)原註、彼の唱ふる第四篇は羅典譯のを指せるならん。

「吾が義の神よ、願くは我が喚はるときに吾が聲を聞きたまへ、爾我が惱みし時に我を寛かせたまへりき。嗚呼主よ我を憐み吾が祈禱に耳を傾けたまはんことを」(詩四〇一)。願くは彼等の聞けること、我が知る所とならずして聞くことを得たらんことを是れ我が如上の語を讀むに當りて、我が叫びし所を我が彼等の爲に語れるやう、彼等の思ふこと無からん爲なり。蓋は我若し彼等の諦聽せることを感せしならば、然く

叫ぶこと能はざりし故なり。將又唯爾のみ聞きたまひし所の吾が獨語に於て、若我が同一言語を用ひたりしとも、其の吾が胸臆より迸るに當りて、其の我に就て意味せし物を、彼等に就て意味する如きこと無かりしは明かなることなればなり。實に我は恐怖を懷いて戦き、吾が父にしてまします爾の慈悲に由りて、望と大なる喜とを以て輝けりき。而て爾の善靈の吾人に向ひて、「人の子よ汝等何日まで心遅きや、何故虚妄を愛し虚言を求むるや」と言ひし間は、大凡此等内なる情緒(望と喜)は吾が目にも光りて吾が聲に震へりき、蓋は我往に虚妄を愛し虚言を求めたればなり。嗚呼主よ爾は既に其の聖子を崇め、彼を死より興して之を爾の右に擧げたまへり。是れ彼の其處より約束の物、即ち訓慰師、眞理の靈を遣らん爲なりき。彼既に之を遣れるに、我之を知らざりき。彼既に之を遣れり、蓋彼既に崇められて死より興り、天に昇りたればなり。此時までは聖靈未だ賜はらざりき、耶穌猶未だ崇められざりし故

なり。而て預言者は叫ぶらく、「汝等何日まで心遅きや汝等何故虚妄を愛し、虚言を追ひ求むるや主既に其の聖者を崇めたるを知れ」と。彼「何日まで」と叫び、「知れ」と喚ぶ、而も我久しく知らず、虚妄を愛し、虚言をば追ひ求めたりき。是故に我聽て裸けり。蓋は此の言は我が昨吾に在つて好く記憶しつる如き人の爲に宣べられし故なり。我が眞理として執りたりし所の彼の空想の中には、其の虚妄あり其虚言ありき。我此の悲むべき回想の中に、己に對する嚴酷痛切なる宣告を高聲に叫びき。虚妄を愛し空言を追ひ求むる所の彼等が、今吾が聲を聞きたらんことを。若し然せば彼等恐らくは恐懼を生じ、其の迷妄を吐き出し、其の爾に喚ぶに當り、其聲爾に聞えしならん。蓋は吾人の爲に實際の死を受けたりし彼、今爾の前に吾人の爲に仲裁を爲したまへばなり。「汝等怒ることも罪を犯す勿れ」(詩四〇五)と我讀みつ、嗚呼我如何に深く打たれしぞ乎、蓋は我今や將來に於て再び罪を犯さざらん爲に、過去の我

に對して怒を發することを學びし故なり。然り怒ることは正當なり。蓋は我に在り罪を犯し、者は、闇黒の國に屬する所の別性に非ざりし故なり。即ち己に對して怒ると無く、反りて赫怒の日の爲、即ち爾の義しき審判の顯るゝ日の爲に、己の爲に神の赫怒を積む所の彼等の主張するが如くならざりしなり。將我既や善事を己の外に求めず、又我が之を求むるに吾が肉の眼を以てせず、又此の地に屬ける日光の内に於てせざりき。蓋は快樂を外界に求むる者は幾もなく、見るべき物即ち一時的の物質の上に衰蒞す、然り彼等は其の飢へたる思想を以て、枯れたる骨をすら嘗むるを厭はざるなり。願くは彼等が飢渴の爲に倦み疲れて「誰か我に善事を示すべきや」と喚ばんことを。然らば我等が之に答へて「嗚呼主爾の面の光を我人の上に照したまへ」(詩四〇七)と曰ひしとき彼等は之を聞くべかりしなり。何となれば吾人は凡の人を光す光に非ざればなり、唯爾其の光を吾人の上に照らしめたまふ。是故

に嘗て聞かりし吾人も今爾に由りて光れるなり。
願くは我が之を見て之を彼等に示す能はざりし故に吾が齒を切みし彼の永劫なる内なる光を彼等の見るを得んことを願くは其の目其の惑へる目に其の心を注ぎて我に來り、誰か我に善事を示すべき乎と我に曰はんことを。蓋は吾が靈魂の密室、己に向つて怒を發せし處、我が悔恨を以て満たされし處、我が己を犠牲として獻げ、己の畜人を殺し新生の曙光を認めて、爾に望を屬せし處、此の處に於てすら爾吾に甘美となり、吾が心に満足を與へたまひし故なり。我懺文に由りて此等の事を讀み、靈に由りて此等の事を解しき。且我は時の賜物を消費し又時の爲に消費する所の、此の世の善福に富まんことを願はざりき。爾の永劫なる惟一の中に、他の穀物と酒と膏とを有したればなりき。
我其の下節「我其の同一者を(彼の言ふ所を見よ)待望して安然に臥し且眠らん」とあるを讀むとき、心の底より高らかに喚はひき、蓋は「死は勝に

呑まれんと書かれし言の成らんとすれば、誰か我を禁すべけん乎。實や變らざる所の爾は即ち其の同一者、安息と一切悲哀の忘却とは爾に由りて存す、蓋は爾の外他に何等の實在あらざればなり。將又吾人は爾に非ざる諸の事物の爲に勞すべからず、蓋は「主よ唯爾のみ吾人をして希望を以て住ましめたまへばなり」。我熱心を以て讀みき、尙且我亦嘗て其の一なりし此等無感覺の死骸を、如何にして助くべき乎を思ひ得ざりき。我はダビデの如上の金言に教へられて、始めて天の靈に甘くせられ、爾の光に點火せられし聖書に對して己、冷酷にして而も盲目なる誹謗者なりしことを見ることを得たり。而して今猶之が敵なりし輩の爲に哭くなり。

我何の時に此の聖日の當時の全き歴史を臆ひ出づべき乎、否我之を忘るゝ時なきなり。將我爾の鞭撻の疾痛なること、爾の慈悲の驚くべく迅速なることを語ることを怠るべからざるなり。當時爾我を責

ひるに齒痛を以てしたまへり、其の隱痛の口言ふべからざるまで劇切を極めたる際、不圖吾が心に、一の考起りぬ、曰く吾が友人等に請ひ、一切治療の神なる爾に我が爲に祈らしむべしと。是に於て我机にて此事を録し之を讀むべく彼等に遣りぬ。而て我が哀願の爲に跪きしや否や、苦痛頓に去るを覺えぬ。其の苦痛は何なりし乎、其の苦痛今安に在り乎、我恐れ戦ひて曰く、嗚呼主たる神、吾が神よと。我之を告白す此の如き事物吾が生れしより以來未だ會て之有らざりき。此の深淵に在つて爾の啓導然く新に我が上に啓示せられぬ。我第信じて喜び、爾の聖名を讚稱しき。然れども其の信仰は我が既往の罪に就て安心することを許さざりき。是は爾の没式バプティスムに由るの外未だ赦されざるものなりし故なり。

第五章

彼アムプロースに請ひて彼を其の讀者の指南となす。

葡萄收穫祭の休暇の過ぎにし時、我は若干の言語を、其學生の爲、他の言語の商賈を發見せざるべからざるミラン人に贈りぬ。蓋は我爾に勤仕すべく決心せし故に、呼吸の困難と胸の苦痛の故に、修辭學の教授たるに既や適せざりし故なり。而て我書を爾の監督聖アムプロースに贈り、吾が過去の罪過と現在の決心とを告げ、我が然く大なる恩寵〔赦罪の没式〕を受くべく己を準備する爲に、爾の聖書の如何なる部分を主として讀むべき乎、之を我に勸告しくる、やう彼に請ひぬ。彼は我に預言者イザヤを研窮すべく命せり、我推するに、是はイザヤは福音に就き、又異邦人の召命に就き、最も顯著なる預言者なる故なりしならん。然れども我其の讀みし所の首章を理會すること能はず、而して謂へら

く、全篇皆斯の如く難解ならんと、因て我が更に聖書の文體に熟せん曉、再びせんと暫く之を含さぬ。

第六章

彼アリピアス及びアテオデタスと與にミランにて汎式を受けたリ。

吾が名を申告するの時來りし時、吾人は田里を出で、ミランに歸れり。アリピアスも亦同時に爾の中に再生すべき心を決しぬ。彼は既に爾の聖禮に適しき謙遜の心を賦與せられ、又頑強に其の肉體を鍛鍊して、氷結せる伊太利の土を跣足にて歩かんとするに至りぬ。此は敢て之を試みる者の甚罕なる事業なり。吾人は此の一行にアテオデタスなる小兒を加へぬ。是は肉に由れる吾が子、吾が罪の孽なりけり。爾は

彼を貴く造りたまへり、彼僅に十五歳に過ぎざりしかども、尙且其の才能に於ては多數の老年なる學者よりも超れりき。嗚呼主吾が神、萬物の創造者、豊かに吾人の醜骸を再造するを得る所の者、我爾の賜物を爾に感謝す。蓋は我此の小兒に對しては、罪の外何等分つ所無ければなり。我は固より爾の善好なる訓練を以て彼を教育したりき、然も爾の默示、然り唯爾の默示に隨順せしなり。爾の賜物を爾に感謝す。我に「教師」と題せる一書あり、是は彼と我との間の對話なり。爾は知しめず、吾が問者の口に挿入されたる一切の思想は彼の有ることを、彼唯十六歳の童なりきといへ。我彼を見て日々彼に於て愈益驚異すべき事物を認めぬ、彼の聰明は我に充すに敬畏を以てせりき。蓋は爾ならで誰か斯の如き奇跡を生ずる者ぞ。

彼蚤く其の生命を此の世より伐り去られたり、而も我は危疑の陰影を伴ふなくして彼を紀念す、蓋は我其の童時の爲にも、青春の爲にも、其の

生前の如何なる部分の爲にも、何等憂懼すべき事無ければなり。吾人は今恩寵に於ては吾人と同年なる者として、爾の訓練によりて一齊に練習さるべく、彼をも與に伴ひ行き、而て一齊に没式を受けたり。過去に對する一切の憂悶は、是に於て消え畢りぬ。而て我、數日の間、人類の救拯に於ける爾の智慧の深度を默思するの無上の喜悅に満たされて、飽くこと無かりき。爾の教會の音樂の吾が靈魂を貫くとき、其の讚美と唱歌との爲め、我は如何なる涙を流したりし乎。音樂の吾が耳に溢れ、爾の眞理吾が心に滴りしとき、渴仰の潮流吾が胸に満ち來りて涙降りき、然も其の涙には満足ありけり。

第七章

ミランに於ける讚美歌吟唱の組織、殉教者ガープニアスミ。プロマシアスミの遺骸。

ミランの教會は僅に此頃此種〔讚美歌吟唱〕の慰藉と奨励とを行ひ始め、心と聲とを併せて歌ふ兄弟衆の大なる喜悅に入りぬ。是は童帝プレンチニアンの生母デヤスチナ、アリヤン者の爲に誘はれて信せし所の異端を、爾の聖人アムプロースが拒みし故を以て、彼に對して逼害の手を下し、より、約一年の間なりき。神の民は其の監督なる爾の聖僕と、生死を共にせんと決心して、聚りて教會を守護せり。吾が母も亦其中に在り、活きて隣り、此の痛心なる看護隊の幹部に屬しき。我自身といへども、猶未だ聖靈の點火を受けずといへども、全會の警戒と憂慮とを分てりき。其の悠長且傷心の夜番の爲に、會衆の全然疲勞に陥るを

防ぐ爲、東洋諸國の習慣に従ひ、讚美歌と詩篇とを歌ふ習慣の起りたるは此時なりき。此の習慣其日より今日に存して、ミラン以外の全世界に散在せる多數、吾我は爾の全群と曰はん、今日吾人の模範に従へり。其際爾は又此の著名なる監督に、異象を以て、爾の殉教者ガトーニアスとプロタシアスの隠れたる墓を示したまひき。爾は彼等の遺骸を此の多年の間爾の秘庫の中に、敗腐を拒ぎて保存したまひき。是れ爾の適當なる時に之を出して、以て唯一婦人、然しながら女王なりし彼女の狂暴を禁遏せんが爲なりしなり。彼等は發見せられしや否や開堀せられ、相當なる儀式を具へてアムブローズの館に遷されぬ。其の昇かれて往來を過ぐるに當り、汚れたる靈に惱めりし人々皆療され、其の逐ひ出されたる悪鬼等、悉く告白せしめられたり。然のみならず茲に一の市民あり、其の數年間盲目なりしこと、人知らざる者無かりき。其人喧しき歎聲の湧ける理由を聞知し、躍り上りて己を其の所に導くべく

録悔懺ンテスガウア

其の相に請ひぬ。其の所に至りしかば、彼熱心に歎願して、其の手巾を以て爾其人の死、爾の目に然く尊かる其の聖徒の柩に觸ることを許されたり。彼其の手巾を以て己の目に加へしかば、其の目開きぬ。是に於て此の奇跡廣く傳はり、爾の光榮愈耀き、有繋の女子逼害者も未だ謙りて之を信するほどの智慧に及ばざりしかども、尙且狂暴なる逼害の手を控へぬ。嗚呼吾が神、感謝の爾に歸せんことを、爾は何處より何處まで吾が記憶を導きて、我が既に忘れ又既に過ぎたりし所の此等洪大なる爾の慈悲を、爾に告白せしめんとしたまふ耶、尙且當時爾の膏油の美香の、然く薫しかりし際にも、我未だ爾を慕ひ奔らざりき。是故に我は爾に捧ぐる讚美歌を耳にするとき、愈痛く哭かざるを得ざりき。我が爾を渴望せしや久しかりき、今や終に恰も田里の茅舎に於て恣に空氣を吸ふ人の如く、爾を吸ひ得る人となりてき。

録悔懺ンテスガウア

第八章

四百十四

エチアアスの告白、アウガスチンの母モニカの死と其の幼時の教育。

人をして一心を以て一家を成さしむる所の爾は、亦吾が郷邑の青年エチアアスを吾人に加へたまへり。彼は往に内務省の書記たりし者なりしが、我に先つて改悔め、没式を受け、俗務を抛て身を爾に獻げたりき。吾人は既に伴侶として活きたりしが、猶更に同じに住んで其の撰擇したへんには、如何なる土地に於てすべきを考へ、亞弗利加に還る路に上りぬ。而てタイパー河の河口オスシアに到りしとき、吾が母茲に在りて死せりき。我今筆を馳する爲に多くを省略す、嗚呼吾が神、我が茲に語らずして遺すところの無量の恩恵に對する吾が告白と感謝を受けたまへ。然れども我は我を生みし吾が母なる爾の婢女に就き、我が靈魂

録悔懺ンチスガウア

録悔懺ンチスガウア

の生まんと希ふ所の事物を語ることを遺すべからず。彼女は實に我が二重の母なりき、肉に在りては我が此の世の光に生まれたるが爲、靈に在りては我が永劫なる光に生れたるが爲。然れど我が茲に録さんとするは彼女の恩恵に非ず、唯爾の彼女に於ける恩恵にぞある。彼女は己を造りしに非ず、又己を訓練せしにも非ざればなり。彼を造りたまひしは爾なり、將其の肉に由れる父母も、其の愛する女の如何なるべかりしかを知らざりしなり。爾の聖者の杖、爾の獨子の律法、爾の教會の活ける技なる忠信なる家庭に於て、爾を畏るゝことを彼女に教へたり。尙且彼女の我に語りし如く、彼女は己の教養を其の母の看護に歸する所は、其の父を乳養し、大なる少女の嬰兒を負ふ如く、彼を其の背に負ひ歩きたりし、白髮の老婢に歸する所に如かざりしなり。蓋は此の老婢は其の功勞の爲、又其の高齡と高德との爲、此の基督教の家庭に於て、其の主人夫妻の爲、篤く尊敬する所となれりき。是故に此

四百十五

の一家族の女子の看護は此の老婦に任せられたりき。彼女は忠實に其の義務を盡し、必要なる場合には、聖なる謹嚴を以て訓練を加へ、大なる智慮と先見とを以て其の教養を施せりき。蓋は彼等が定時に、其の両親の食卓に於て適量の食餌を用ひし外は、其の喉の渴の爲に燥けし際にも、水を飲むことを容さざりき。其の悪習の浸染を恐るゝこと此の如き物ありき。彼女は恒に智き勸告の語を添へて曰ふらく、「御身等今葡萄酒を得る能はざるが爲に水を欲したまふならん、御身等後日嫁したまひて、戸棚と土窖との鍵を所有したまはんととき、水をばさて含き酒飲む癖を作りたまはん。」

此く教訓し此く其の權威を使用しつゝ、此の老婦は能く娘子等の遠慮なき年齢の貪婪を遏め、彼等に教ふるに婦徳を以てし、其の渴を制ゆべきを以てせりき。此故に彼等は復び適しからぬ事を爲すを好まざりき。尙且爾の婢女が其子なる我に語りし如く、酒の嗜好一たびは彼女

を捕へたりき。蓋は其の父母は彼女の貞靜なりしが故に、樽より酒を汲み出す爲に、常例として之を遣りき、母は恒に樽の口に爵ヨウを扶たすげて、其の汁液を盥に注ぐに先ち、其の縁に唇を接けて、其の二滴三滴を啜りき。蓋は母は初其の味を嫌ひし故なり。且母は此事を酒より生ずる興憤を愛するが爲に爲せしに非ず、唯汎種の玩具に心浮かれ、常に長者の權威に制せらるゝ彼の小兒の狂的衝動に基きしなりき。

斯くて日々其の少分に少分を加へつゝ、蓋は小事を悔る者は少しづつ、陥ると云へばなり、終には勁烈なる酒を盛りたるを、一盃又一盃貪り飲むほどの習慣に滑り落ちたり。彼の賢良なる老媪と其の謹嚴と今果して安に在り乎。嗚呼主爾の治療的威能の吾人を監視したまふ外には、此の潜伏せる疾患に對して功を奏する物ある無き乎。父母教師、皆逝て留らざるなり、獨爾之を造り、之を召し、惡人の作用を用ひてすらも吾人の靈魂の救の爲に効はたかせたまふ爾のみ現前したまひき。嗚呼吾

が神爾は如何に彼女の爲に効き、如何にして之を治したまひし乎。爾は他の靈魂よりして靦面咬むが如き罵詈を喚起し、爾の密かなる源處よりして外科醫の鋭刀を抜き出し、唯一撃を以て其の潰瘍を伐り去りたまひしに非ず乎。

蓋は恒に母と與に害に往きし一奴隷少女、偶母と唯二人なりし際、其の年若き主婦を誹り、其の缺點を指摘し、之を侮辱して「一酒徒」と叫びし故なり。其の一言の飛剪家庭に達しぬ。母は己の失行を顧み、即時己を詛ひて之を絶ちたり。友の甘言が雇人を敗る如く、敵の罵辱亦雇人を誠む。尙且爾は彼等に報ひたまふ、彼等の作用によりて爾の爲したまへる其の善事の爲ならず、彼等の意圖せし其の惡意に向つてなり。此怒號せし奴隷少女の主意は、母を陥れんと欲するに在りき、之れを正さんとするに非ざりき。此れ其の彼等の唯二人なりしとき、其の然く叫びたりし理由なりき。然らずんば或は此時、此所にて二人の間に突然

喧嘩の起りし故なりき。然らずんば或は又母が前に語る所無かりし爲に刑罰の虞ありし爲なりしならん歟。嗚呼主天地の主宰者、洪水の怒濤を起して其の聖意に役せしめ、其の狂潮を操縦して數世紀に及ぶ爾は、一の靈魂の罪を治せんが爲に他の靈魂に罪を命じたまふ。然れば此の説話を聞く者、若己が悔改せしめんを欲する人が、己の言に由りて悔改すとも、之を己の能力に歸すること勿れ。

第九章

彼其の母の美德を敷演す。

此の如く貞潔又端正に人となり、其の兩親に由りて爾に仕ふることを學ばず、反りて爾に由りて兩親に仕ふることを學び、齡婚期に登るに及んで、吾が父に歸し、彼を己の主として仕へ、彼を爾に獲るに努め、其の婦

四百二十

徳を以て爾を彼に説明せり。其徳や爾の彼女を美ならしめ、其の従順なるが爲に可憐ならしめ、其の良夫の目に愛好すべからしめたまひし物なり、彼女は忍んで彼の不信を耐へ、之が爲に其の良夫に對して不平の心を懐かざりき、蓋は彼女は彼の爾を信じ、之に由りて潔めらるゝに至るやう、彼の上に慈愛を垂れたまはんことを待望したればなり。吾が父は一大好漢、唯憾らくは猛暴なりき。彼女は良夫の激怒に對して、行爲若くは言語を以て對ふることを爲さず、唯其の平靜に返るを待ちて、徐に己の行爲を説明せりき、若彼故なく母を怒る事あり時には。終に、其良夫の嚴急彼女の如かざりし老婦等、往々彼女に來りて語り、其の面貌の傷痕を示し、其の良夫の性行を怨むる時、母は笑ひて、然し眞率に彼等の言を答めて、其の一たび己の爲に讀まるゝ所の結婚規則を聽きし以上、各此を一の契約として見、己之に由りて下婢とせられし者なることを思はざるべからず。隨て又皆各己の境遇を記念し、其の君

四百二十一

たる主たる良夫に反くべからざることを彼等に告げたり。彼等母の此の言に驚異し、而も其の如何に猛烈なる良夫を耐へ忍べるか、尙且バトリンシアス〔彼が父の名〕が夫婦喧嘩の爲、其の妻を撲ちたること無く、又一日も彼女を遠かりしこと無きを知るが故に、之を疑ふこと能はざりき。彼等若し其理由を問へば、女は之に告るに、我が上に述べし所を以てせりき。母の勸告を聞きて之に隨ひし者は、其の言の驗あるが爲に感謝し、之を聞て棄る者は蹂躪せられ、錯用せらるゝに終りき。母の姑も亦初禍根を成すなる下婢等の耳語を聞て母を憎みたりしが、後には其の能く注意と忍耐と従順とを維持するに由りて感服し、母の同意を得て、親ら其の子に訴ふるに、一家の平和を破る所の彼の下婢等の干渉的言説を以てし、之を罰せんとを要求するに至れりき。父は其の母の要求に従ひ、家庭の秩序と其の成員の諧和を保たんが爲、彼女の己に指名したる所の女婢等を責めて、其の可とするまで彼等を鞭てり。

而して、後彼女之を戒めて曰く、以後我が喜に入らんが爲に、吾が嫁を誹謗する者は亦此の如くせられるべしと。爾來何等不和の種子を播く者なく、二人の婦人は完き善意と一致とを以て一家に住みにき。嗚呼神、吾が「慈悲」よ、爾は更に他の大なる恩賜を、爾が其の腹に我を造りたまひし其の善女に賦與したまひき、分れ争ふ魂の間に、其の欲するがまに、和睦を行ふことは是なりき。母は嘗つて一人より聞きし苦言——憎惡に勝へず、他の同情に愬へて敵の背後に酸語し、隨て咳唾する所の噴毒の爆裂——を、他に向つて反覆するが如きことを爲すこと無かりき、之を爲して和睦を助くるを得るに非ざりせば。

是は我に在りて獨一小徳と見ゆ、我未だ不幸にして人類の群聚然かも廣く恐怖すべき罪惡の感染を自ら撒布する者が、單に怒れる者の言を怒れる者に反覆するのみならず、更に未だ嘗て言はれたる事なき物を之に附和しつゝあるを知らざりき。是故に苟も仁心あらん人は、須ら

く惡言を以て争論を興し、又之を激すが如き事を慎むのみならず、是れ一小事に過ぎず、——更に心を竭して親切なる言語を以て之を靖むることを勉めざるべからず。此の如き是れ爾自ら之が師たりし所の内心の學校に於て、吾が母の爾より學びし道なりき。最後に母は其の良夫を、其の世を去らんとする前に終に、爾に獲たりき。其の悔改以來、母が其の不信の日に忍耐したりし此等彼の罪過をば再び哭くを要せざりき。

且母は爾の女婢の中なる女婢なりき。大凡彼女を識る所の人は、彼女に由りて爾を美め、且敬ひ、且愛したり。是れ母が其の心の中に爾の在すを感せし故なり。其の果なる聖き會話、即ち之が證據なりしなり。

母は一の良夫の妻なりき。彼女は己の父母を離れて、己の家庭を治むるに敬畏を以てし、善工の爲に隣保に稱められ、其の小兒を成育し、其の爾の所より迷ひ出づる毎に、再び産の劬勞を嘗めたり。最後に其の永

眠に就くの前、役式の恩寵を受け、伴侶として爾の中に生けりし爾の僕なる吾人の凡に已其の母の如く齊く看護し、女の如く仕へたりき。

第十章

天國に就ての母子の對話。

吾が母此の世を去らんとする日、此は吾人は之を知らざりしかども爾は之を知りたまひき、其日漸く近づきし時、爾の攝理の密かなる作用（我が信する如く）に由りて、母と我と逆旅の窓の架に、偶二人相凭れぬ。此の窓は此家の花園を瞰下する所なりき。是は正にタイバー河の畔、オスシアの近處に於てなりき。茲處に吾人は衆群と別れ、ミランよりせる長途の旅行に疲れて、將に就かんとする航海の爲に、元氣を回復したりしなり。吾人の茲にて相語らひし會話こそ樂しかりけれ。蓋は

後に在りし物を忘れて、前に在りし物に到達したればなりき。吾人は自ら「眞理」なる爾の前にて互に問ふらく、吾人の目未だ見ず、耳未だ聞かず、未だ人の心に入り來らざる所の彼の聖徒の永生の状態は如何なるべきかと。吾人の靈魂の唇は、飢え渴いて爾の原泉を慕ふ、爾と偕に在る所の生命の源泉なる聖流を慕ふ、是は各其の力量に循ひて其の水を灌がれ、之に由りて其の光榮なる問題に就き、若干の稀薄なる觀念をだに得るあらんが爲なり。

吾人の會話佳境に入り、此の世の最も光耀く日の下なる、最も樂しき肉體の快樂も、此の永生の幸福に對へては、比ふべからず名くべからずと云ふ結論まで達せしや否や、吾人の燃ふる心は同一者に向ひて沖り、物質的楷梯の梯子を一步一步と上に攀ち、日月、星辰が其光耀を下界に投下する所の其の天に登れり。此の以上更に高く精神の梯子を以て無窮に登り。茲に爾の事を且考へ、且語らひ、爾の工の思議すべからざる

に驚異しつ。而て吾人の心に歸入し、又之を越えて再び其の無盡藏の地に移れり。茲は爾が眞理の食物を以て永久イスマエルを食ひたまふ所、既に在る所の物、將に在らんとする所の物、一切の物を來す所の「智慧」として「生命」の在る所なり。此の生命自身は來すべからず、唯在る者なり。其の嘗て在りし如く、常恒に在るべきなり。蓋は此の中には過去も無く、未來も無く、唯現在有るのみなればなり。蓋は過去も、未來も、永劫に非ざればなり。吾人が斯く語らひて切に之を慕へりしとき、吾人は立どころに吾人の心意の全力を以て之に觸るゝこと一刹那、忽ち喟然嘆息を發し、靈の初實の質を茲に遺して、心意は再び己の口舌の多辯に返りぬ。茲には一言一句、始あり終あり、復に吾人の主なる爾の「言」と異なれり。彼は彼自身を以て住み、曾て舊ぶることを識らず、而して一切の萬物を新にせり。

其時吾人互に曰へらく「若し肉の煩擾寂まり、空と地と海との影亦寂ま

り、天と靈魂と亦寂まり、靈魂が己を超越し、復た己を思はざるに至らば、若一切の夢寂まり、一切感覺の發露、一切の舌、一切の記號寂まらば、一切去來する物寂まらば、——大凡耳を有する者は彼に宣べて曰はん「吾人は自ら己を造らず、惟永劫存まる者吾人を造れり」と、——然れど彼等が此の消息を告げし後、再び己の沈黙を保ち、己を造りし彼に其耳を傾けしこと、及び彼のみ唯獨り語り、彼等に由らず獨己の爲に語りしこと、又吾人が彼の聲を聽くに、肉の舌に縁らず、天使の聲にも縁らず、雷鳴又此の如き類の物に縁らず、彼の造りし萬物の中に吾人の愛する彼の聲を聽きたることを思へ、——全然某の仲介者無くして彼の聲を聽きたることを思へ、——吾人は今正に到徹せしなり、思惟の一閃電を以て、萬物の上に住む所の「永劫の智慧」に觸れしなり。——獨之のみ維持せられ、之より劣れる他の一切の思想の方式の撤去せられ、獨之のみ觀者を奪ひ、彼を呑み、神秘の歡喜を以て彼を沒めたりと思へ、彼の永劫なる生命

とは、吾人が恒に之を得ざるを嘆く所の此の契心默會の一刹那に似たらず乎。是れぞ即ち「汝の主の喜に入れよ」と謂はれし言の眞意ならず乎。嗚呼何日此事あるべき乎。「我人は凡て興るべし、然れど一切變ること無かるべし」と云ふ、是れ何日此事有るべき乎。

此の如く吾人は語りき、唯精確に此の體裁と此等の造語とを用ひざりしのみ。然れども主よ爾は知しめず、此日斯く相語りつる間、吾人が此の世と其の一切の快樂とを擧げて、一瓊物と見做せしことを知りたまふ。其時吾が母我に謂つて曰く「吾が子よ、我が事を言は、此世に復た他の快樂を看出さず。我猶何の爲すこと有る乎、何故此世に存らふる乎、我之を知らざるなり。蓋は此の世の希望は我が衷に死にたればなり。昨までは猶一の目的ありて、我之が爲に暫時此の世に存へんと願ひたりき。他にあらず、我が死せる前御身が正統的信者となるを見んことなりき。吾が神は今此の恩恵を十分に否餘るまでに我に許し御

身が神の僕たるを見たれば、此の世の幸福を欲ふ所なし。我此の世に何をか爲ん。

第十一章

モニカの狂喜と其の痛。

我如何なる答を吾が母に爲せしか、我殆ど記せざりき。五日間、又一週間内に、母は熱に捕へられ、其の疾患の間に卒倒して、一時人事不省に陥りき。吾人は其の救助に愕き趨りしが、母は疾くも其の感覺を回復し、吾が兄「モニカは數子を有らたり」と己と、其の臥床の傍に立てるを見て曰く「我何處に往きたりし乎」と。其時吾人悲痛の爲に言ふと能はざりしかば、母は吾人の面を見つめて曰く「御身等我を此地に葬るべし」と。我は吾が平和を維持して僅に涙を揮ひしとき、吾が兄は母は他郷に死

するを欲せず、其の故郷に死することを寧ろ幸福なる運命と考へたりと、其確信したる所の意味を語る。母は之を聞て、兄を見るに、此かる思考を懐きたるを咎むる色あり、願て我に謂つて曰く、「彼の言ふ所何事ぞ」と。猶附け加へて曰く、「御身等の欲する所に此の體を葬れ、之が爲に心を煩はす勿れ、唯吾が御身等に願ふところは、我を憶ひ出んとき神の祭壇に於て我を憶へ」と。

母が其の扱め得たる言語を以て、此命令を受けしとき、復一語なく、直に死の苦痛に捕はれたり。然れども爾見るべからざる神よ、我爾が其忠信なる婢僕の心に撒布したまふ恩寵、之に由りて然く驚異すべき果實を結べる所の恩寵を熟考して、喜悅に満たされて爾に感謝しき。蓋は母の所願が其良夫の遺骸の傍に、己の爲に準備したりし其の墓に屬せし事は、我が好く知る所なりし故なり。蓋は彼等は、大なる輯睦を以て同栖したりしかば、母は猶他の幸福を切望したりき。即ち其の海外の

漂泊より故郷に歸り、己の塵を良夫の塵と交ふることを許されたることを、皆人の知らんことなりき。人の靈の神の旨を領解する能はざる斯の如し。

何日此の甘痴なる慾望の母の懷に起り初めたりし乎、其の何日爾の豊なる恩寵に由りて銷へ初めし乎、我之を知らざりき、我唯歡喜と驚異とを以て其の當に然るべきを感せしのみ。且其往に窗に凭りたりしとき、我此の世に何を爲んと言ひし其の語より見るも、其の既や故郷に死んと待望し居らざりしこと明かならざりし乎。後我之を聞きぬ、吾人のオスシアに達せし後幾もなくして、我が偶在らざりし際、彼女は母たる從容を以て吾が友人の若干に語るに、其の此世を賤み死を慶こぶ事を以てせりき。彼等此の如き勇氣を此の柔弱なる一婦人に爾の與へ賜へるに駭き、此く遠く故郷を去りて死することを思ひたまは、心細くは在さずやと問ふ者ありしに、母は答へて「否、神を去ることは遠から

す、世の終に神何處より我を呼びたまふ乎を知るまじと曰ふが如き恐怖あると無しと。是に於て其の疾を得たる第九日、其の五十六の齡、吾が三十三の齡に於て、此の忠信敬虔なる靈魂は、肉より放たれて天に歸したり。

第十二章

彼如何に其の母の死を哭きし。

吾人の手づから母の兩眼を閉ぢたりし時、悲哀の高潮吾が胸にうちよせ、涕泣と溢れ來れり。尙且吾が眼は、意志を張りて乾くまでも涙を控へぬ。其苦闘我に如何ばかり疼かりしか、其の最後の息断れしとき、童兒アデラデタスは聲を發ちて泣き出だせり。吾人之を呵せしかば、彼は獨り飲泣したりき。其の如く我が哀なる小兒性の涙に沸かんば

録悔懺ンチスガウア

かりなるを、吾が心中の成年の聲之を叱して、其の平和を維持せしめぬ。蓋吾人謂へらく是の如き死は、徒に涕泣を以て弔ふことは適しからず、此等悲哀の慟哭は、世間の之れを以て死者の禍苦、若くは其の消滅を悲しむ所以に過ぎずと。吾が母は禍ならず、將全く死せるにも非ざりき。吾人は之を其の活きたりし生涯により、其の偽なき信仰により、又吾人の疑ふ能はざる道理によりて審なりと知れりき。然らば則ち吾が心中に隠く所の沈痛は何なりや、彼の樂しく貴き交際の間を卒然割き放したるより起れる生血滴たる傷痕是なり。我は吾が母の美德を寶藏せりき。蓋は其の最後の疾を得しとき、母の爲に我が聊か看護の役を執れるを見て、我を愛て、善兒と喚び、心に痛く感動しつゝ、其の未だ嘗て吾が口よりせる怒れる語、禮なき言を聞きたるとなきことを曰ひき。尙且吾が神、創造者よ、母に對する吾が尊敬と我に對する母の謙卑との間に、如何なる比較の立てらるべき乎。此の如く

我は此の貴重なる慰藉より奪はれしが故に、吾が靈魂は痛く傷つき、吾が生命は二に裂けぬ。蓋は母の生命と我の其とは惟一なりし故なりき。

是故に童兒の啼哭の制せられしとき、エギデアスは詩篇を取りあげて詩を唱へ起し、「我憐憫と審判とを歌はん、エホバよ我爾を讀めうたはん」(詩百一)と曰ひ、全家舉りて之れに和したり。此の新聞の弘まるに及んで、多數の兄弟と敬信なる婦人等皆來り聚ひき。彼等の自ら其義務として葬式の支度に執りかゝりし間、我は別室に退きて此の場合に適せる慰言を我に與ふるに足る人々を發見して彼等と語りぬ。是に於て眞理の鎮痛劑、爾のみ知しめす吾が疼痛を和めぬ。彼等は之を知らざらば、惟熱心に吾が言を聴き、我が悲哀の感覺を有ちしかの如く想へりき。然れども誰も聞くこと能はざる所の爾の耳聽の内に我は吾が心の柔弱を呵し、悲哀の滿潮を控制しぬ。其の退くこと唯一時のみ、又忽ち

朝し來る、恰も其の性なるかの如くなりき、尙且我は涙を漏し面を變ふるには至らざりき。然れども吾が心の中に遏止しつゝありし事物を、我能く自ら之れを知りき。且夫我は此の世界の法則に由り、必ずや吾人の頭上に落ち來るべき此等人事の變故が、意外にも此の如き勢力を以て我を壓倒したることを痛く哀みぬるが故に、我は我が悲哀に第二の悲哀を附け加へて悲みつゝあり、遺骸の埋葬の爲に運ばれけるとき、二重の悲哀の爲に魂を銷したりしなり。吾人は幸に涙一滴落さずして往き而して歸りぬ。遺骸の墓の頭に据へられ、將に土に委ねられんとするの前、此の地の習慣に隨ひ、死者の爲に吾人の「贖罪」の犠牲の獻げられし前、吾人が一に聚りて爾の前に各祈禱を口より吐露せし時だに、我は能く泣かさりき。然れども此の終日我は心の中に哭き、痛ましき念を以て、吾が悲哀を醫したまふやう爾に求めぬ。是れ吾が爲し得つる極なりけり。然れど爾は我が言を肯ひ

録悔懺ンチスガウア

たまはざりき。是は我が今も信する如く、此の一例を以て、習慣の力は何等欺罔の言に食はるゝなき靈魂をすらも動すに足ることを、我に記憶せしめんとしたまひし故なりき。我は出て沐浴すべく心を決しぬ。蓋我此の沐浴は其の名詞を希臘語「バライイオン」より引き來りしと聞きし故なり、其の「バライイオン」と云へるは、其の能く心より悲哀を駢除するが故なり。嗚呼孤兒の父よ、我爾の慈悲に之をも告白す、即ち我出て往いて沐浴したれど、沐浴せし後と前と何等異なる所なかりし事を。蓋は吾が煩悶の苦痛は心より洗はるゝこと無かりし故なり。其時我寐りぬ、既にして又寤めたり。吾が悲哀は滅する所なかりき。我獨り臥床に在りて爾の聖僕アムブローズの歌章の眞なるを思ひ興しぬ。

「あめつちしろす、

つくりぬしのかみ、

ひるをかゝやかしめ、

よるをねむらしむ、

つかれしひとの、

やすみをうくべく、

なやめるたましひの、

なぐさめを得べく。

録悔懺ンチスガウア

是に於て我は漸々徐々に己に返り、爾に然かく忠信に、吾人には事毎に聖徒たるに適ひて、然かく深切、懇懃なりし吾が母と其の生涯との觀念舊に復したりき。我其の卒然たる死亡に思ひ至る毎に、爾の前に憚ら

母の爲に泣き、將我が爲に泣きたり。我吾が閉塞せられたりし涙に己が任に横溢すべき許可を與へ、之を布いて吾が心の臥床となせりき。吾が心此の臥床の上に安息を得たり、蓋は人には非らで、唯爾のみ能く吾が飲泣を聞くを得たまひし故なり、人ならば我を嘲りもやしつらん。主よ我今此の書に於て爾に告白す、讀まんと欲する者は之を讀め、而して欲する如く判斷せよ。人若吾が母の爲、吾が肉眼に一時死に失せたる此の母、我が爾に由りて生きんが爲に、斯く多年吾が爲に歎きたりし此の母の爲、我が一時一刻歎きしことを罪なりと思はんとも、尙且我を笑ふ勿れ。寧願くは其の慈愛を擴げて、以て、凡爾の基督の兄弟の父たる爾に對して、吾が犯し、此の罪の爲に泣かんことを。

第十三章

彼の死せる母に對する祈禱。

吾が心の傷、即ち之に由りて人或は肉の愛の缺點を發見したらんと思はるゝ所の此の傷、此時よりして癒へたれば、神よ我は爾に全然別種の涙を爾の婢の爲に灑ぎぬ。蓋此の涙は大凡アダムに由りて死する靈魂を待つ所の危険を思ふときに、土底まで震はるゝ精神より迸る所のものなり。縱令母は基督に由りて活かされ、其の肉より救はれし前に、其の信仰と會話とに由りて爾の聖名の榮めらるゝやう生きたりしとはいへ、尙且其の更生の没式バプティスムを受けし以來、其の死するの日に至るまで、爾の律法に合はざるもの、一言其の唇より泄れたることなしとは、我が敢て斷言せざる所なり。爾の子なる「眞理」其の兄弟を愚者よといふ者は地獄の火の危険に干るべしと宣へり、若爾人を慈悲を加へず、量りた

録悔懺ンチスガウア

まは、其の生涯の如何に讃むべき人といへども、禍なるかな。爾は過ちて行ひし事を悉く心に記めたまはざるが故に、吾人は爾の目の前に慈憫を得べき望あり。若人爾に對して己の眞價を算へんとせば、爾の豊かなる恩寵の外何の算ふべきものか有らん。人皆己を知らんことを誇る者の、主に由りて誇らんことを。

嗚呼「吾が誇」「吾が生命」「吾が心の神よ、是故に我が樂んで爾に謝する所の吾が母の此等の善行をば、一時之を置いて今彼の罪の爲に爾に哀願す、嘗て木の上に懸けられ、今吾人の爲に挽回を爲すべく、爾の右に坐したまひし所の吾人の傷夷の「治醫者」の名に由りて、願くは吾が言を聴きたまはんことを。我は知る彼女が慈悲を以て人を遇し、己に罪を犯せる者の罪を心より免せしことを、願くは爾彼女が救拯の水に入りし以來、生前多年の間に犯したるべき其の罪を免したまはんことを。嗚呼主願くは之を免したまへ、願くは之を免したまへ、彼女の審判にかゝつら

録悔懺ンチスガウア

ひたまふ勿れ。蓋は其の言眞なる爾、約して哀恤ある者は哀恤を受くべしと宣へたまひたればなり。彼等の哀恤ありし事も、哀恤まんと思ふ者を哀恤み、慈憫まんと思ふ者を慈憫みたまふ爾の恩賜なりしなり。蓋我が信する如く、爾は既に吾が哀願する所を爲したまふらん。然れど主よ、爾は自由の心よりせる吾が唇の獻供を納けたまはんことを、爾の攝理の日彼女の上来りしとき、彼女は其の身の豊に掩はるゝと、香料にて包まるゝことを好まざりき。彼女は又何等驕りたる紀念を望まず、故郷なる其の墓に葬らるゝことをすら驕らざりき。彼女の吾人に下せし最終の命令は此の如き類に非ず、唯吾人が爾の祭壇の前に己を記臆せんことなりき。此の祭壇は彼女が一日も罅くること無く仕へし所、彼女の知りし如く、其の神聖なる犠牲の此處よりして與へられし所、手にて記して吾人に逆ふ所の書の其の側には抹消されし所、吾人の罪を數へ、吾人を訴へんことを求めて、而して吾人の由つて克ち得

録悔懺ンチヌガウア

る所の「彼」其人あるが爲に、何等發見する所なき敵の、此の下にて足下に
 蹂まれる、所なり。誰か彼の罪なき血を以て彼に返辨し得る者ぞ、誰か
 彼の手より吾人を引き落さんが爲に、其の吾人を購し所の價值を彼に
 贖ひ得る者ぞ彼の吾人の「救拯」の聖禮を以て、爾の婢は己の靈魂を信仰
 の紐と結び着けたり。

何人も爾の保護の許より彼女を率き去る權力を有せざらんことを、獅
 子又大蛇の暴力又は詭計を以て其の通路を妨ぐる者あらざらんこと
 を。蓋は彼女は何等負ふ所なきやう答へて、狡猾なる讒訴者の爲に論
 破せられ、若くは陷穽せらるゝが如きこと無く、反りて其の一切の負債
 を「彼」に免されたることを答ふべければなり。「彼」の吾人の爲に納れた
 る賠償は、彼之を負はせずとはいへ、誰も之を返納すること能はざる物
 なり。是故に彼女が其の良夫、即ち初の良夫にして又惟一なる良夫と
 與に安然に休まんことを是れ其の心より服従せし所の良夫、其の爾に

録悔懺ンチヌガウア

之れを獲んが爲に忍んで爾の爲に果を結びし者なり。嗚呼主、吾が神、
 願くは爾、其の聖僕に靈感し、爾の子輩なる吾が兄弟等に靈感し、我が心
 と聲と筆とを以て仕ふる所の吾が主人等「信者」に靈感し、大凡此の書を
 讀まん者をして、爾の其の肉に由りて我を此の世に出したまひし、爾の
 婢なるモニカと、其良夫なりし、パトリシアスとを、爾の祭壇の前に記憶
 せしめたまはんことを「兩親の爲に祈らんとを請へるなり」。願くは此
 等の人々をして、此の移りゆく世に於ては、吾が父たり母たりし彼等、天
 の父にて在ます爾の下、母にてありける教會の中にては兄弟なりける
 彼等、爾の子どもなる順禮者が其の家を出るより家に歸るまで渴き慕
 ふ所の天上のエルサレムに在りては、我と同じく市民たりし所の彼等
 を、嚴かなる愛を以て記念せしめよ。然らば彼女の臨終の要求が、衆人
 の祈禱に由りて、吾が祈禱に由りてよりも寧ろ吾が此の「懺悔」に由りて愈
 豊かに許さるべきなり。

アウガスチン懺悔録大尾

明治四十年十二月十三日印刷
明治四十年十二月十六日發行

アウガスチン懺悔録奥付
定價金七十錢

譯者 宮崎八百吉

發行者 福永文之助

印刷者 横濱市太田町五丁目八十七番地
村岡平吉

發行所 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
警醒社書店

印刷所 横濱市山下町八十一番地
福音印刷合資會社



不許
複製

宮崎八百吉先生譯

新約私

羅馬書

定價 金十二錢
郵稅 二錢

此書の原書は獨逸の聖書協會の出版に係る最も新にして又最も古き希臘文原書なり目下聖書改譯は基督教界の希望にして彼の難讀難解を以て有名なる羅馬書の如き殊に其必要に逼れり是れ此の私譯の出る所以なり譯者外希臘語の修養を積み内靈火の啓導を感じ聖書研究に従ふこと十年一旦此の原書を得茲に聖書改譯の端を發き先づ筆を此書に着け盡く從來の晦澁不曉を一掃し前人未發の微妙を摘發し添ふる新舊譯筆を異にせる主なる聖句の對照は隱微なる羅馬書の宗教意識を抉剔し出し斬新警拔なるパウロの死生觀を論述せる羅馬書管見の一篇を以てせり

▲修

養錄

松村介石著

定價 六十四錢

▲基

督傳

ニコル著
柏井園譯

定價 六十五錢
郵稅 十錢

▲マルチン、ルーテル傳

村田勤著

定價 六十四錢

▲ゴルドン將軍傳

徳富健次郎著

定價 六十五錢

▲リビングストン

有島武郎合著
森本厚吉

定價 六十四錢

▲二宮尊徳翁研究

松村介石著

定價 八十四錢

▲アブラハム、倫古龍

西武雄著

定價 四十五錢

▲ガーフフィールド傳

留岡幸助著

定價 六十四錢

▲二宮翁と其風化

留岡幸助著

定價 六十四錢

東北大學校長農學博士佐藤昌介先生序
東北大學教授農學士高岡熊雄先生校閱
東北大學校カメナ會編

18/8/41

▲箴言講義 湯淺吉郎著 郵定價 六十五錢

▲商店事務實驗錄 岡田市治著 小定價 八圓二十五錢

▲山路小品文集 愛山路著 郵定價 四十五錢

▲耶穌の時代 原田助著 郵定價 六十五錢

日野眞澄君著 附錄 猶太の地理氣候及曆一斑

▲基督思想 一名 星野光多著 郵定價 七十五錢

▲世界傳道旅行 木村清松著 郵定價 六十五錢

▲二宮尊徳と劔持廣吉 留岡幸助著 郵定價 六十五錢

▲昆蟲分類學 上卷 松村松年著 小定價 十五錢

▲基督の人訓 牧野虎次著 郵定價 二十錢

▲基督の靈訓 宮川輝經著 郵定價 二十錢

▲基督の聖訓 牧野共著 郵定價 六十五錢

▲日本古代史と 神道との關係 久米邦武述 定價 五圓

▲基督之教會 宮崎八百吉譯 郵定價 八圓

▲民福の搖籃 留岡幸助著 郵定價 二十錢

▲基督教の根本問題 七一ア一、アビス著 郵定價 二十六錢

▲基督教倫理學綱要 七一ア一、アビス著 郵定價 二十錢

▲最近思想と基督教 ケーベル、浮田和良、小崎弘道、澤名正先生講演 郵定價 六十五錢

▲吾家の歴史 四十二年用日記 郵定價 六十四錢

▲團體と基督教 澤老名正著 郵定價 四十五錢

(加藤博士の所論を載す)

星野光多君著修養三書

基督教一班

四六判 五百三十ページ
美本 定價金壹圓

○序編、五章 ○概論編、七章 ○教理編、十章 ○基督編、十章
○生活編、十章 ○教會編、五章 ○傳道編、五章
○通計五十二章、日曜日の讀物として一章を通過する時は、一年にして全篇を讀了すべし、内容は所教全般の要目に亘りて其概観を知得せしむ。通俗的神學書と見做すべしものありて、自ら淺く難く難く類を異す。サレバ凡て基督信者たらん人の讀みて利益せらるべきは毫も疑なき所なり。牧師たるべきは地方に居住又は旅行する者に取りては、特に良友たり餘師たるべきを斷言す。

基督教談叢

四六判 四百ページ
クロス製美本 定價金七十五錢

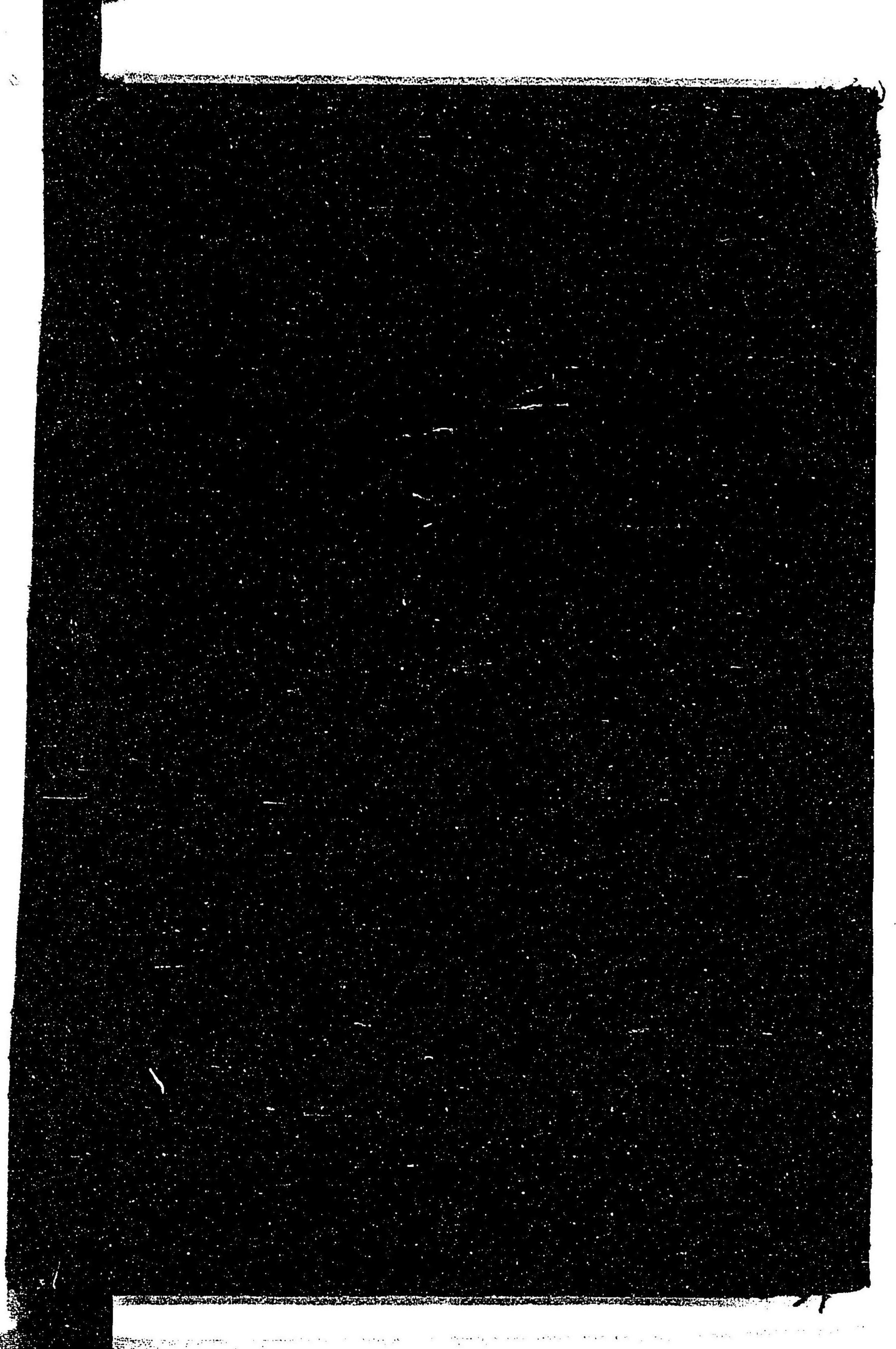
○一名日毎の教へ日々一章を讀む時は一年にして全編を讀了すべし。書中に収容せる宗教的事實、大小五百項、一々聖書の本文を適切に説明例証せり。説教者、演説家、日曜學校教師諸君のためには材料の小倉庫といふべし。

基督教思林

四六判 四百二十ページ
クロス製美本 定價金七十五錢

○一名日毎の學び體裁凡て談叢と同じ、異なる所は此は古今思想家の聖思良想を以て、聖書本文に含まれたる宗教的真理を闡明發揮せんと試みたるにあり。編末に掲げたる思想家百七十餘家の一覽表は、本書を應用する者に大なる便利を供すべし。

325
35



020208-000-8

325-35

アウガスチン懺悔録

宮崎 八百吉/訳

M40

ABI-0007

